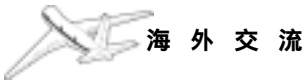


## 大阪大学とアーヘン工科大学との学術交流



海外交流

真島和志\*

Academic Exchange between Osaka University and RWTH Aachen University

Key Words : Academic exchange, Joint-research seminar, Aachen University

大学は、研究を主導するとともに人材を育てる場である。21世紀の人は国際化に対応することが必須であることは世界的な潮流である。ハーバード大学やエール大学は、ほぼ全員の海外留学あるいは海外でのインターンシップを経験させるプログラムを始めようとしている。また、ヨーロッパの中ではポーニャ・プロセスにより、多くの学生が海外の大学で一定の範囲の単位を取得するようになっている。このように、高等教育を受ける学生の流動性は急速に高まっており、現在、世界で約200万人が海外で学び2015年には約800万人になると推定されている。学生にとって魅力ある大学であり続けるためには、国際学術交流が重要となってきた。

大阪大学も留学生を世界中から募る努力を進めている(英語カリキュラムなど)。一方、学部・大学院の学生を短期間海外に留学させる取り組みを強めている。たとえば、「学生交流助成(派遣)」や「学生海外研修プログラム等助成」といった大阪大学独自の奨学金を開始したことはその意欲の表れである。また、COEプログラムにより多くの大学院学生が海外へ短期間留学し成果を上げている。このような取り組みの流れのなかで一つの取り組みとして、大阪大学とアーヘン工科大学の大学間交流について紹介する。

大阪大学とアーヘン工科大学との交流は、長年に

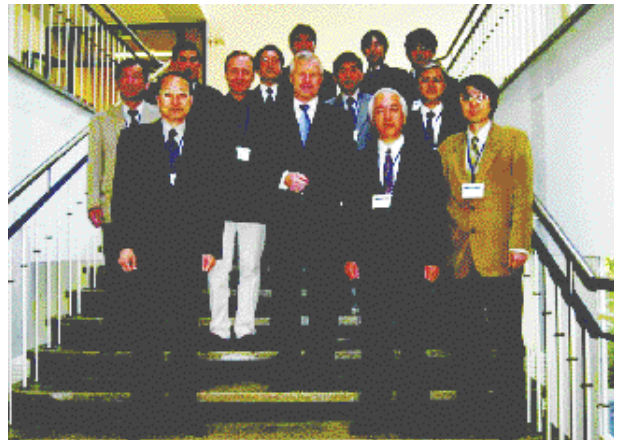


図1 Burkhard Rauhut学長(Rector)・Okuda教授・Büchs教授と大阪大学からの参加者の集合写真



図2 歓迎の挨拶をされるBurkhard Rauhut学長

わたり部局単位で活発に行われてきた。個々の研究者レベルについても、学生の交流を含めて多くの先生が積極的に行ってきたにも関わらず、平成17年の段階で大学間交流協定はもとより、学部間交流協定も締結されていない状況であったが、平成17年9月5日にアーヘン工科大学のBurkhard Rauhut学長が来学され大学間交流協定が締結された。

アーヘン工科大学は、1870年にプロシアのフリードリッヒ3世によりPolytechnical Schoolとし



\* Kazushi MASHIMA

1957年1月生

1981年大阪大学理学部高分子学専攻修士課程修了

現在、大阪大学大学院基礎工学研究科、機能物質化学領域、教授、理学博士、有機金属化学

TEL 06-6850-6245

FAX 06-6850-6245

E-mail : mashima@chem.es.osaka-u.ac.jp



図3 主催者を代表して挨拶されるOkuda教授



図4 講演される北教授(薬学研究科)

て設立された歴史を持っている。現在、24学部(大学院)を擁するドイツ最大の工科大学であり、約3万名の学生が学んでいる。学生の50%は工学系であり、約18%が自然科学を専攻している。ドイツ国内の評価は、いろいろな面でミュンヘン工科大学と比較されることが多いが、非常に高い評価を受けている大学の1つである。学部・大学院としては、工学、理学だけでなく、医学部、歯学部、人文科学系の学部・大学院も充実している。地理的な理由(オランダおよびベルギーに接していること)から国際化に熱心に取り組んでおり、現在約5千名の海外からの留学生を受け入れている。その半数がヨーロッパ諸国であり、アジア諸国(中国、韓国、トルコ、インド、インドネシアなど)で約1/4を占める。このようにアーヘン工科大学は、多様性と国際性に富んだ優れた研究大学である。また、3カ国のトップの大学(オランダのデルフト工科大学、スイスのETHチューリッヒ、イギリスのImperial College London)と研究大学連合(4つの大学の

最初の文字Imperial/Delft/ETH/Aachenを組み合わせ、IDEA Leagueと称している)を組み、学术交流並びに学生交流を推進している。

大阪大学とアーヘン工科大学の間で大学間交流協定が締結されたが、これまで大学間交流協定は実質を伴わないことが多かった。しかしながら、国際化の大きなうねりの中で手をこまねいているわけにいかない状況にあり、大学間の交流を実質的に進めることが是非とも必要である。「どうやって交流を活発化するか」について、アーヘン工科大学側の窓口であるOkuda教授とBüchs教授と平成17年の10月にアーヘンにおいて話し合う機会を持った。第一段階として、相互に交換留学生を派遣・受け入れる研究者レベルで相互に知り合う必要があるという認識で一致し、アーヘン工科大学において平成18年5月11日から2日間、これまでに交流実績のある生物系・化学系について第1回のシンポジウムを開催した。大阪大学から戸部義人先生、久保井亮一先生、田谷正仁先生(以上基礎工学研究科)、神戸宣明先



図5 シンポジウム前日の歓迎会(市庁舎のレストランで)



図6 歓迎レセプションで挨拶される戸部教授

生,三浦雅博先生,大竹久夫先生(以上工学研究科),北 泰行先生(薬学研究科),鬼塚清孝先生(産業科学研究所),地石雅彦氏(国際交流課,グローニンゲン大阪大学事務所)の10名の参加で開催することができた。その成果として学生の交流が具体化しつつある。

シンポジウムの開催に当たり,アーヘン工科大学学長から「特筆すべきこととして大学間交流協定締結後,一年以内にこのようなシンポジウムが開催されたことであり,今後の活発な交流を期待する」と

いう趣旨の挨拶があった。とにかくスタートを切ることができたので,関係者の協力を得て,今後も実質を伴う大学間交流を進める計画である。アーヘン工科大学との次回のシンポジウムを平成19年の秋(11月の予定)に大阪大学で開催することを計画しているので興味ある方は著者まで連絡をお願いします。交流の内容よりも経緯を中心とした紹介になったが,本文が国際化の一つの取り組みの例として読者の参考となれば幸いである。

